教科書文庫
4
815
41-1931
2000039478

初級中等國文典

塚本哲三著

有朋堂書店

41841
教科書文庫
4
815
41-1931
20000
39478

教科書文庫
4
815
41-1931
2000039478

昭和六年四月八日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用教科書

初級中等國文典

塚本哲三著

東京
有朋堂書店

広島大学図書
2000039478

資料室
375.9
Tsu11

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 39478 圖書

例言

一、本書は、中學校第一學年の國語科に於ける文法の教科用書として編述したものであります。

二、本書は、文部省所定の教授要目に基き、主として品詞の一斑、文語と口語との區別、用言の活用等について、なるべく平明に說述する事と致しました。

三、本書は、上級用としての拙著『中等國文典』若しくは『簡明中等國文典』と連絡が取れるやうに編述する事と致しました。

初級中等國文典

目次

第一章 總說……一

文法——言語——文——文字——假名——平假名——片假名——五十音圖——假名遣——國語——文語——口語——品詞——體言——用言

第二章 名詞……六

名詞——數詞

第三章 代名詞……七

代名詞——文語代名詞——口語代名詞

第四章 動詞……九

動詞——文語動詞——口語動詞

第五章 形容詞……一〇

形容詞——文語形容詞——口語形容詞

第六章 助動詞……一一

助動詞——文語助動詞——口語助動詞

第七章 副詞……一三

副詞

第八章 接續詞……一四

接續詞——文語接續詞——口語接續詞

第九章 感動詞……一七

感動詞

第十章　助詞……一八
助詞（テニヲハ）
第十一章　用言の活用……二〇
活用——語幹（語根）——語尾——活用形——未然形——連用形——終止形——連體形——已然形——命令形——活用表
第十二章　動詞の活用……二五
四段活用——上一段活用——上二段活用——下一段活用——下二段活用——上一段活用——下一段活用——カ行變格活用（カ變）——サ行變格活用（サ變）——ナ行變格活用（ナ變）——ラ行變格活用（ラ變）
第十三章　動詞の音便……四〇
動詞の音便——イ音便——ウ音便——撥音便——促音便
第十四章　形容詞の活用……四六
ク活用——シク活用——イ音便——ウ音便
第十五章　助動詞の用法……四九
指定の助動詞——推量の助動詞——時の助動詞——打消の助動詞——使役の助動詞——受身の助動詞——可能の助動詞——尊敬の助動詞——希望の助動詞——比説の助動詞

目次終

廣島大學圖書之印

初級中等國文典

第一章　總説

〔一〕吾々が話をしたり文章を書いたりするのには、自然に定まつた法則があつて、その法則に外れてゐては、自分の考を完全に人に傳へる事は出來ない。この自然の法則を**文法**といふ。

〔二〕今「美しい花が咲いてゐる。」といふ一つの文を取つて調べて見るに、これは、

美しい　花　が　咲い　て　ゐる

言語
文
文字
假名
平假名
片假名
五十音圖

といふ六つの言語が一つらなりになつて、それが、

美し い 花 が 咲 い て ゐ る

といふ十の文字で書き現はされてゐる。このやうに、人の考を音聲で現はすものを**言語**といひ、言語をつらねて或纏つた思想を現はすものを**文**といひ、言語を形に書き現はすための符牒を**文字**といふ。

〔三〕吾々が日本語を書き現はすために用ひる文字には、假名と漢字との二種がある。**假名**には**平假名**と**片假名**との二種があつて、何れも漢字をもとにして我が國で作つた文字である。

〔四〕假名を次のやうに排列して**五十音圖**といひ、文法上大切なものになつてゐる。

五十音圖

行／段	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
サ行	サ	シ	ス	セ	ソ
タ行	タ	チ	ツ	テ	ト
ナ行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ行	ヤ	イ×	ユ	エ×	ヨ
ラ行	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ行	ワ	キ	ウ×	ヱ	ヲ

五十音圖の中でイ・エ・ウの三字は重複してゐる。又、イとヰ、エとヱ、オとヲは通例同じやうに發音される。發音が同じで字の違ふ假名を、古來の習はしに從つて正しく使ひ分ける仕方を**假名遣**といふ。

假名遣

〔五〕或國の言語をその**國語**といふ。卽ち日本語は我が國の國語である。我が國の國語には、

國語

(一)　月出でたり。

(二)　月が出た。
　　月が出ました。

のやうに二つの種類があつて、(一)のやうなのを**文語**といひ、(二)のやうなのを**口語**といふ。

文語
口語

〔六〕言語は、その性質上、次の九種に分たれる。

名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞　副詞
接續詞　感動詞　助詞

これらの一つ一つを**品詞**といふ。品詞の中、名詞・代名詞の二つを一括して**體言**といひ、動詞・形容詞・助動詞の三つを一括して**用言**といふ事がある。

品詞
體言
用言

〔七〕美しい花が咲いてゐる。

の例についていへば、

美しい＝形容詞　花＝名詞　が＝助詞　咲い＝動詞
て＝助詞　ゐる＝動詞

である。代名詞とは、

あれは私の兄です。

に於けるあれ私の類、助動詞とは、

我は知らず。雨が降つてゐます。

に於けるずますの類、副詞とは、

花いと美し。汝の言頗るよし。

に於けるいと頗るの類、接續詞とは、

山又山を越えて行く。書を讀み或は字を習ふ。

に於ける又或はの類、感動詞とは、

あな樂し。おい君、どこへ行くのか。

に於けるあなおいの類である。

第二章　名詞

〔八〕山川學問幸福富士山楠正成などのやうに、事物の名や地名・人名など、一切の名を現はす語を名詞といふ。名詞は口語も文語も同じやうで區別はない。

〔九〕一二三四人五本六册などは數量を現はし、第一第二三號四つ目五番などは順序を現はす。このやうに事物の數量や順序を現はす名詞を特に數詞といふ事がある。

練習

○次の文中から名詞を摘出せよ。數詞があつたらそれをも示せ。

一、野にも山にも、櫻の花が美しく咲いてゐる。

二、食卓を圍めるは、父と母と二人の弟と、伊豆より來れる少婢と、われとを加へて合せて六人なり。

三、勤勉は幸福の母なり。

第三章　代名詞

代名詞
文語代名詞
口語代名詞

〔一〇〕汝若し我が言を用ひずば、必ず悔ゆる日あらむ。

あそこに白く見えるのは何ですか。あれは櫻です。

等に於ける汝我あそこ何あれは何れも事物の名の代りに用ひられてゐる。このやうに事物を指してその名の代りに用ひる語を**代名詞**といふ。上例に於ける汝我の類は**文語代名詞**、あそこ何あれの類は**口語代名詞**である。代名詞の中には、文語・口語同様のものも少くない。

練習

○次の文中から名詞・代名詞を摘出せよ。

一、汝の故郷はいづこなるか。

二、あそこに立つてゐるのはあなたの兄ですか。いゝえ私の從兄であります。

動詞
文語動詞
口語動詞

三、この世の星を花といひ、彼の世の花を星といふ。

第四章　動詞

〔一一〕花咲く。　鳥歌ふ。　早く起きる。

右の例に於ける咲く歌ふ起きるは何れも事物の動作を現はしてゐる。又、

美しき花あり。　高い山がある。

に於けるありあるは事物の存在を現はしてゐる。このやうに、事物の動作又は存在を現はす語を**動詞**といふ。上例に於ける咲く歌ふありの類は**文語動詞**、起きるあるの類は**口語動詞**である。

練習

○次の文中から動詞を摘出し、文語・口語の區別をいへ。

一、小川の水さら〳〵と流る。

二、息も絶えさうな思をして高い山へ登つて行く。

三、櫻はたゞ一本咲きたるもよし。狹き路を蔽ひて、あまた咲き匂ひたる、まためでたし。

四、豐後灣の風光は美しい。こゝから日の出を眺めた趣などは、ナポリのながめに似てゐるといふ。

第五章　形容詞

〔一三〕味甘し。風光が美しい。

に於ける甘し美しいのやうに、事物の性質や狀態を現はす

形容詞
文語形容詞
口語形容詞

語を**形容詞**といふ。上例に於ける甘しは**文語形容詞**、美しいは**口語形容詞**である。

練習

○次の文中から形容詞を摘出し、文語・口語の區別をいへ。

一、高き山に登りて美しき花を見る。

二、清き川瀨に浮べる月影いと面白し。

三、僕は君の勇ましい姿を見て、實に嬉しい。

第六章　助動詞

〔一三〕日暮れぬ。野山に遊ばむ。花がまだ散らない。

に於けるぬむないのやうに、動詞に添つてその意味を助ける語を**助動詞**といふ。助動詞は、

助動詞

行かしめたり。努力しませう。

のやうに、他の助動詞に添ふ事があり、又稀には、

よき人なり。第一着は彼だ。雪のごとく白し。

のやうに、名詞・代名詞・助詞等に添ふ事がある。上例に於ける

ぬむしめたりなりごとくは**文語助動詞**、ないませうだの類

は**口語助動詞**である。

文語助動詞
口語助動詞

練習

○次の文中から助動詞を摘出し、文語・口語の區別をいへ。

一、牡丹などはいとよき花なれど、遠く眺め廣く觀るべきものにはあらず。其の趣櫻花といたく違へり。

二、小さく整つた白い三層樓が見えます。何といふ美しい天主閣であります。

三、野にも山にも花咲きそめぬ。いざ今日は櫻狩して樂しく一日を暮らさむ。

第七章　副詞

〔一四〕月明かに照す。日がかん〳〵と輝く。

風光甚だ美し。この話は實に面白い。

に於ける明かにかん〳〵と甚だ實にのやうに、動詞や形容詞に副つてその意味を限定する語を**副詞**といふ。副詞は、

いと靜かに眠る。たいさう立派に出來た。

のやうに、他の副詞に副つてその意味を限定する事もある。

上の例に於ける明かに甚だいと靜かにの類は文語文に用ひられた副詞、かん〳〵と實にたいさう立派にの類は口語

副詞

文に用ひられた副詞である。副詞には文語・口語同樣のものも少くない。

練習

○次の文中から副詞を摘出せよ。

一、汝必ず來るべし。

二、月は西の空にうつすりと殘り、野には朝露がしつとりとおりてゐた。

三、靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆どこの三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

第八章　接續詞

〔一五〕君も行くか。さらば我も行かむ。

雨が降つたけれども道はさう惡くない。

接續詞
文語接續詞
口語接續詞

に於けるさらばけれどものやうに、上下の文又は語句をつなぎ合はせる語を**接續詞**といふ。上例に於けるさらばは**文語接續詞**、けれどもは**口語接續詞**である。接續詞の中には文語・口語同樣のものも少くない。

されど　されども　然れども　さらば　されば　然

らば　然れば　故に　因りて　從ひて　爲に　間

の類は文語接續詞の主なるもの、

その上　そして　さうして　それに　おまけに　それとも　けれども　ところが　そこで　それで　それなら　さうすると　すると

の類は口語接續詞の主なるもの、

又　且　尙　及び　況や　まして　又は　或は　若

しくは　但し　併し　尤も　處　併しながら　さりながら

の類は文語・口語兩用の接續詞の主なるものである。

練習

○次の文中から接續詞を摘出せよ。

一、富士は窓の右に立ち、或は左に現はる。

二、無事消光罷在候間何卒御安神下されたく候。

三、行かうかそれともよさうかと迷つてゐるうちに日が暮れた。

○次の文中の——の所に適當な接續詞を入れよ。

一、春は來ぬ。——花未だ開かず。

二、山——山に咲きほこる櫻の花の美しさ。

三、あの男は大きなからだをしてゐる。——その割に力はない。

感動詞

第九章　感動詞

〔一六〕あゝ悲し。　あはれ嬉し。　おや驚いた。

に於けるあゝ　あはれ　おやのやうに、感動を現はす語、

いかに申候。　いざ進まむ。　おい一寸待て。

に於けるいかに　いざ　おいのやうに、人を呼び掛けたり、注意を促したりする語、又は、

おうそれこそ望む所なれ。　はい只今參ります。

に於けるおう　はいのやうに應答を現はす語を**感動詞**といふ。上例に於けるあゝ　あはれ　いかに　いざ　おうの類は文語文に用ひられた感動詞、おや　おい　はいの類は口語文に用ひら

れた感動詞である。感動詞の中には文語・口語同樣のものも少くない。

練習

○次の文中から感動詞を摘出せよ。

一、あはれ今年の秋もいぬめり。

二、あな面白の笛の音や。いでわがために今一曲かなでよ。

三、おやお珍しい。まあよくいらつしやいましたね。

第十章　助詞

〔一七〕鳥が鳴く。花を見る。雨降らば行かじ。

に於けるがをばのやうに、他の語に附屬して、その語と下に來る語との關係を明かにする語を助詞（じょし）又はテニヲハといふ。

〔一八〕助詞は文語・口語同樣のものも少くないが、又、

西洋より歸る。……文語

西洋から歸る。……口語

徒歩にて行く。……文語

徒歩で行く……口語

食べつゝ歩く。……文語

食べながら歩く……口語

のやうに、文語と口語と相異なつたのもあり、又やはかはばやかななむな……そのやうに、文語にだけあつて口語にはないのもあり、「雨は降るし風は吹くし」のしのやうに口語にだけあつて文語にはないのもある。

練習

○次の文中から助詞を摘出せよ。

一、梢の花美しく咲き匂ふ。

二、風いと涼しきに、月の影さへほのめきて、面白き夜のさまなり。

三、歩きながら話をしませう。

四、路は峻しいし、足は勞れるし、私は閉口しましたよ。

五、子等供よ、學の業をな怠りそ。

六、菜の花に戯るゝ蝶の美しきかな。

第十一章　用言の活用

〔一九〕今死ぬといふ文語動詞を取つて、それが如何に用ひられるかを考へて見るに、

活用

人の將に死なむとするやその言ふこと善し。

一門悉く王事に死にはてたり。

命あるものは必ず死ぬ。

惡疫のために死ぬる者おびたゞし。

死ぬれば則ち止む。

潔よく御國のために死ね。

といふやうに、その使ひ途によつて、死な死に死ぬ死ぬる死ぬれ死ねと語形が變つてゐる。このやうに語形の變ることを**活用**（くわつよう）といふ。動詞ばかりでなく形容詞・助動詞、卽ち凡ての用言には活用がある。

〔二〇〕前の活用の例について見るに、

な

語幹
語根
語尾

死
に
ぬ
ぬる
ぬれ
ね

といふやうに何れの場合にも死はそのまゝで、變るのはなにぬぬるぬれねの部分だけである。このやうに語形の變らない部分を**語幹**又は**語根**といひ、語形の變る部分を**語尾**といふ。

〔三〕第十九項に示した死ぬといふ文語動詞の用例について考へて見るに、

死な＝まださうなつてゐないといふ趣。

活用形
未然形
連用形
終止形
連體形

死に＝下に「はて」といふ用言がついてゐる。

死ぬ＝文句の切れ目になつてゐる。

死ぬる＝下に「者」といふ體言がついてゐる。

死ぬれ＝すでにさうあるといふ趣。

死ね＝命令する語。

かうなつてゐる。活用の文中に於ける用ひ方を**活用形**といふ。

〔三〕死なはまださうなつてゐないといふ趣を現はす形である所から**未然形**といひ、死には下に用言のつく形である所から**連用形**といひ、死ぬは文句の切れ目になる形である所から**終止形**といひ、死ぬるは下に體言のつく形である所から**連體形**といひ、死ぬれはすでにさうあるといふ趣を現

はす形である所から**已然形**といひ、死ねは命令を現はす形である所から**命令形**といふ。

已然形
命令形

〔二三〕用言の活用の文中に於ける用ひ方は、種々樣々であるが、今死ぬの例に於て見た所の六つの用法は、その最も代表的なものであるから、一般に用言の活用は上の六つの名稱によつて現はされる事になつてゐる。

〔二四〕用言の活用は一目で分るやうに表にして示すのを常とする。之を**活用表**といふ。卽ち死ぬといふ語の活用は次の如き活用表を以て示されるのである。

活用表

語尾 ＼ 語幹	活用形					
	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

未然・連用等は凡てその下にある「形」の字を省略したものである。

第十二章　動詞の活用

〔二五〕書くといふ動詞を取つて、口語と文語とを比較して見ると、

活用形	文語	口語
未然形	字を書かず。	字を書かない。
連用形	字を書き續く。	字を書き續ける。
終止形	字を書く。	字を書く。
連體形	字を書く人。	字を書く人。
已然形	書けば書き得。	書けば書ける。
命令形	とく書け。	早く書け。

四段活用

このやうな風で、文語・口語共に、語の活用は、

書か　書き　書く　書け

の四つである。之を五十音圖に當てて見ると、ア段・イ段・ウ段・エ段の四つに當り、そして終止形はウ段である。かやうな活用を**四段活用**といふ。卽ち書くといふ動詞は文語・口語共にカ行四段活用である。

〔二六〕起きるといふ動詞をとつて、口語と文語とを比較して見ると、

口語	文語	活用形
まだ起きない。	未だ起きず。	未然形
漸く起きあがる。	漸く起きあがる。	連用形
朝早く起きる。	朝早く起く。	終止形
朝早く起きる人。	朝早く起くる人	連體形
朝起きれば顏を洗ふ。	朝起くれば顏を洗ふ。	已然形
早く起きよ。早く起きろ。	とく起きよ。	命令形

上一段活用

このやうな風で、口語では、語の活用は、

起き

の一つである。之を五十音圖に當てて見ると、イ段の一つに當り、そして終止形と連體形とになる、已然形にれ、命令形には又はろが添つてゐる。文語では、語の活用は、

起き　起く

の二つである。之を五十音圖に當てて見ると、イ段・ウ段の二つに當り、連體形になる、已然形にれ、命令形にはが添つてゐる。

この例に於ける口語動詞のやうな活用を**上一段活用**とい

上二段活用

ひ、文語動詞のやうな活用を**上二段活用**といふ。卽ち口語動詞起きるはカ行上一段活用、文語動詞起くはカ行上二段活用である。

〔二七〕受けるといふ動詞を取つて口語と文語とを比較して見ると、

口語	文語	活用形
人の譏を受けよう。	人の譏を受けむ。	未然形
よく受け止める。	よく受け止む。	連用形
賞を受ける。	賞を受く。	終止形
人から受ける恩。	人より受くる恩。	連體形
恩を受ければ必ず報いる。	恩を受くれば必ず報ゆ。	已然形
進んで受けよ。進んで受けろ。	進んで受けよ。	命令形

下一段活用
下二段活用

このやうな風で、口語では、語の活用は、

受け

の一つである。之を五十音圖に當てて見ると、エ段の一つに當り、そして終止形と連體形とになる、已然形にれ、命令形によ又はろが添つてゐる。文語では、語の活用は、

受け　受く

の二つである。之を五十音圖に當てて見ると、エ段・ウ段の二つに當り、連體形になる、已然形にれ、命令形によが添つてゐる。この例に於ける口語動詞のやうな活用を**下一段活用**といひ、文語動詞のやうな活用を**下二段活用**といふ。卽ち口語動詞受けるはカ行下一段活用、文語動詞受くはカ行下二段活用である。

〔二八〕煮るといふ動詞を取つて口語と文語とを比較して見ると、

口語	文語	活用形
魚を煮よう。	魚を煮む。	未然形
魚を煮過ぎた。	魚を煮過ぎたり。	連用形
魚を煮る。	魚を煮る。	終止形
魚を煮るにほひ。	魚を煮るにほひ。	連體形
煮れば柔かになる。	煮れば柔かになる。	已然形
よく煮よ。よく煮ろ。	よく煮よ。	命令形

このやうな風で、口語・文語共に、語の活用は、

煮

の一つである。之を五十音圖に當てて見ると、イ段の一つに當り、そして終止形と連體形とにる、已然形にれ、命令形によ又は口語に限つてろが添つてゐる。かやうな活用を**上一段活用**といふ。卽ち煮るといふ動詞は文語・口語共にナ行上一段活用である。

〔二九〕蹴るといふ動詞を取つて口語と文語とを比較して見ると、

口語	文語	活用形
ボールを蹴よう。	ボールを蹴む。	未然形
敵を蹴散らして進む。	敵を蹴散らして進む。	連用形
ボールを蹴る。	ボールを蹴る。	終止形
人を蹴る馬。	人を蹴る馬。	連體形
強く蹴れば高く飛ぶ。	強く蹴れば高く飛ぶ。	已然形
高く蹴よ。高く蹴ろ。	高く蹴よ。	命令形

下一段活用

このやうな風で、口語・文語共に、語の活用は、

蹴

の一つである。之を五十音圖に當てて見ると、エ段の一つに當り、そして終止形と連體形とになる、已然形にれ、命令形によ又は口語に限つてろが添つてゐる。かやうな活用を**下一段活用**といふ。卽ち蹴るといふ動詞は文語・口語共にカ行下一段活用である。

練習

○次の文中から動詞を摘出して文語・口語兩樣の活用表を作れ。（表の作り方は卷末の動詞活用對照一覽表に倣へ）

一、朝食を終へて出づ。

二、道を雲母坂に取り、四明が嶽に攀づ。

三、到る處唯小篠の生ひ茂れるを見るのみ。

四、人々その程々に從ひて、皆神佛に祈願をこめたり。

五、彼方に見える森は、鎭守の森です。

〔三〇〕く(來)るといふ動詞を取つて口語と文語とを比較して見ると、

口語	文語	活用形
まだこない。	未だこず。	未然形
人がき合はせる。	人き合はす。	連用形
家に歸つてくる。	家に歸りく。	終止形
くる人。	くる人。	連體形
車がくれば乘る。	車くれば乘る。	已然形
早くこい。	とくこよ。	命令形

カ行變格活用カ變

このやうな風で、口語・文語共に、語の活用は、

こ　き　く

の三つである。之を五十音圖に當てて見ると、カ行のイ段・ウ段・オ段の三つに當り、そして口語では終止形と連體形とにる、已然形にれ、命令形にいが添ひ、文語では連體形にる、已然形にれ、命令形によが添つてゐる。かやうな活用を**カ行變格活用**といひ、略して**カ變**ともいふ。卽ちく(來)るといふ動詞は文語・口語共にカ變であるが、その活用の有樣は違つてゐる。單にカ變といへば文語動詞のく(來)を指す事になつてゐる。

〔三〕す(爲)るといふ動詞を取つて口語と文語とを比較して見ると、

活用形	文語	口語
未然形	斯くせず。	斯うせぬ。斯うしない。
連用形	斯くしはじむ。	斯うしはじめる。
終止形	斯くす。	斯うする。
連體形	斯くする人。	斯うする人。
已然形	斯くすれば斯くなる。	斯うすれば斯うなる。
命令形	斯くせよ。	斯うせよ。斯うしろ。

このやうな風で、口語・文語共に、語の活用は、

せ　し　す

の三つである。之を五十音圖に當てて見ると、サ行のイ段・ウ段・エ段の三つに當り、そして口語では未然形がせ又はしの兩樣で、終止形と連體形とにる、已然形にれ、命令形によ又は

サ行變格活用サ變

ろが添ひ、文語では、連體形にる「已然形にれ、命令形によが添つてゐる。かやうな活用を**サ行變格活用**といひ、略して**サ變**ともいふ。卽ちす(爲)るといふ動詞は文語・口語共にサ變であるが、その活用の有樣は違つてゐる。單にサ變といへば文語動詞のす(爲)を指す事になつてゐる。

〔三二〕死ぬといふ動詞を取つて口語と文語とを比較して見ると、

口語	文語	活用形
死なない。	死なず。	未然形
死にはてる。	死にはつ。	連用形
死ぬ。	死ぬ。	終止形
死ぬ人。	死ぬる人。	連體形
死ねばおしまひだ。	死ぬれば則ち止む。	已然形
國のために死ね。	國のために死ね。	命令形

ナ行變格活用ナ變

このやうな風で、口語・文語共に、語の活用は、

死な　死に　死ぬ　死ね

の四つである。之を五十音圖に當てて見ると、ナ行のア段・イ段・ウ段・エ段の四つに當り、口語では全然四段活用と一致してゐるが、文語では、連體形にる、已然形にれが添つてゐる。この文語のやうな活用を**ナ行變格活用**といひ、略して**ナ變**ともいふ。卽ち死ぬといふ動詞は文語ではナ變、口語ではナ行四段活用である。

〔三三〕有るといふ動詞を取つて口語と文語とを比較して見ると、

口語	文語	活用形
事が有らう。	事有らむ。	未然形
有りあまる。	有りあまる。	連用形
家が有る。	家有り。	終止形
有る財産。	有る財産。	連體形
有れば與へる。	有れば與ふ。	已然形
君に幸が有れ。	君に幸有れ。	命令形

このやうな風で、口語・文語共に、語の活用は、

有ら　有り　有る　有れ

の四つである。之を五十音圖に當てて見ると、ラ行のア段・イ段・ウ段・エ段の四つに當り、口語では全然四段活用と一致してゐるが、文語では、終止形がイ段である。この文語のやうな

ラ行變格活用ラ變

活用をラ行變格活用といひ、略してラ變ともいふ。卽ち口語動詞有るはラ行四段活用、文語動詞有りはラ變である。

練習

○次の文中から動詞を摘出して、文語・口語兩樣の活用表を作れ。

一、かはゆい鹿の澤山ゐる綠の草原の間に、雪消の澤と呼ぶ小さい池がある。

二、太平洋の千波萬波を越えて、北亞米利加はカリフォルニヤ州のロスアンゼルスまで間を遮るものもない。

三、荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。

四、日が暮れてから闇路を縫ふこと三時間餘、九時過ぎて、我等は或屋敷の構内に車を乘り入れた。

五、門内に戸もない小屋がある。日が暮れて泊るに宿なき旅人のために拵へたものと見える。

動詞の音便

イ音便

第十三章　動詞の音便

〔三四〕四段・ナ變・ラ變に活用する動詞の連用形は、その下に、文語ではて、口語ではて・たりがつく時、發音の便宜上から、他の音に變ることがある。之を**動詞の音便**といふ。動詞の音便には、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種がある。

〔三五〕**イ音便**とは、カ行及びガ行の四段活用の動詞の連用形きがいに變るのをいふ。

開いて（文語）花開いて春漸く深し。
開いて（口語）花が開いてゐる。
開いた（口語）花が開いた。
開いたり（口語）花が開いたり散つたり。

ウ音便

漕いで（文語）舟漕いで止まず。
漕いで（口語）舟を漕いでゐる。
漕いだ（口語）舟を漕いだ。
漕いだり（口語）舟を漕いだり球を投げたり。

ぎがイ音便でいになる時、次に來るてたりは、でだりと濁る。

〔三六〕**ウ音便**とは、ハ行四段活用の動詞の連用形ひがうに變るのをいふ。

問うて（文語）問うて曰く。
問うて（口語）彼に問うて見よう。
問うた（口語）人に道を問うた。
問うたり（口語）人に問うたり問はれたり。

撥音便

ウ音便を「問ふて」「思ふて」「乞ふて」「言ふて」など書くは誤である。

〔三七〕**撥音便**とは、マ行・バ行の四段活用とナ行變格（口語動詞ナ行四段）との動詞の連用形みびにが撥ねる音のんに變るのをいふ。

讀んで（文語）書を讀んで感ずる所あり。
讀んで（口語）讀んで見よう。
讀みて＝
讀んだ（口語）全部讀んだ。
讀んだり（口語）書を讀んだり字を書いたり。

呼んで（文語）人呼んで東海第一となす。
呼んで（口語）あの人を呼んで下さい。
呼びて＝
呼んだ（口語）人を呼んだ。
呼んだり（口語）呼んだり呼ばれたり。
死んで（文語）死んで護國の鬼となる。

死んで（口語）死んでしまつた。
死んだ（口語）あの人は死んだ。
死にて＝
死んだり（口語）死んだり生れたり。

撥音便を「讀むで」「呼むで」「死むで」など書くは誤である。

促音便

〔三八〕**促音便**とは、タ行・ハ行・ラ行の四段活用及びラ行變格の動詞の連用形ちひりが促る音のつに變るのをいふ。

勝つて（文語）勝つて兜の緒を締めよ。
勝つて（口語）勝つて勇立つた。
勝つた（口語）我が軍が勝つた。
勝つたり（口語）勝つたり負けたり。
勝ちて＝
願つて（文語）勝利を願つて止まず。
願つて（口語）願つて出た。
願ひて＝

願つた　願つたり　（口語）皆出場を願つた。（口語）願つたり叶つたり。

取つて　取つた　取つたり　（文語）取つて身の手本とす。（口語）それを取つて下さい。（口語）花を折り取つた。（口語）取つたりやつたり。

有つて　有つた　有つたり　（文語）威有つて猛からず。（口語）用が有つて來ない。（口語）よい事が有つた。（口語）有つたり無かつたり。

取りて　有りて

練習

○次の文中から動詞を摘出し、口語・文語の區別を明かにしてその活用表を作り、且つ音便の場合にはそれを說明せよ。

一、戸をあけて河邊に出ると、其處に薪が積んである。露を拂つて其の上に腰をかけた。

二、月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は、誠になつかしけれど、聊か物足らぬ心地す。

三、暖い雨が降つて來るやうになりました。來るか來るかと思つて此の雨を待ちわびて居た心地はありませんでした。

○次の文に誤があつたら訂正せよ。

四、夜更け蟲吟じて、世の中靜かなる時、たま〳〵書をさしおひて、起つて廊を步む。

五、この事につひて何か思ふところがあつたら、遠慮なくいふてごらんなさい。

六、進むで取らなくては幸運はわが手に入らない。

七、戰ふて破らなければ災禍は常に人に迫つて來る。

第十四章　形容詞の活用

〔三九〕形容詞も語尾が變化する。今文語形容詞高し、口語形容詞高い、文語形容詞美し、口語形容詞美しいを取つて、その活用の有樣を見るに、

活用形	文語	口語
未然形	山高くとも登らむ。 花美しくとも折らじ。	山が高くても登らう。 花が美しくても折るまい。
連用形	山高く聳ゆ。 花美しく咲く。	山が高く聳える。 花が美しく咲く。
終止形	山高し。 花美し。	山が高い。 花が美しい。

連體形	高き山に登る。 美しき花を折る。	高い山に登る。 美しい花を折る。
已然形	山高ければ登るに苦し。 花美しければ人に折らる。	山が高ければ登るのに苦しい。 花が美しければ人に折られる。

即ち、文語の高しは、

語尾	活用形	
語幹	未然	連用	終止	連體	已然
高	く	く	し	き	けれ

と活用し、文語の美しは、

語尾	活用形				
語幹	未然	連用	終止	連體	已然
美	しく	しく	し	しき	しけれ

と活用してゐる。前者の類をク活用といひ、後者の類をシク活用といふ。口語では、

ク活用
シク活用

種類	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	高（たか）		く	く	い	い	けれ
シク活用	美（うつく）		しく	しく	しい	しい	しけれ

となつてゐる。形容詞はこの二種類だけである。そして形容詞には命令形はない。

〔四〇〕高いかな。　美しいかな。

高うす。　美しう見える。

のやうに、形容詞にもイ音便とウ音便とがある。**イ音便**は文語形容詞の連體形きがいに變る場合、**ウ音便**は文語・口語兩樣の形容詞の連用形くがうに變る場合である。

イ音便

ウ音便

練習

○次の文中から形容詞を摘出し、文語・口語の別を明かにしてその活用表を作れ。

一、見るたびに新しきは、朽ちず盡きざる自然のさまなり。

二、冬季休暇も今日限りと思へば、いと心淋し。

三、櫻の花は空の青く水の清い日本の風土に最もよく釣合つて、どこにあつても皆よろしい。

第十五章　助動詞の用法

〔四一〕助動詞はその性質上、指定・推量・時・打消・使役・受身・可能・尊敬・希望・比說の十種に分たれる。そして動詞や形容詞のやうに、助動詞にも活用があるが、その活用の有樣が非常に複雜であるから、活用表を作る事は上級に進んでから學ぶ事として、今はその中の主なるものについて、一通りその用ひ方

を學ぶだけに止める事としよう。

〔四二〕人は萬物の靈長なり。（なら　なり　なる　なれ）

東京は日本の首府たり。（たら　たり　たる　たれ）

指定の助動詞

に於ける文語助動詞なりたりのやうに、事物を指し定める意を現はす助動詞を**指定の助動詞**といふ。口語の指定の助動詞は、だですならの三語で、

あれは櫻だ。（櫻だらう　櫻だつた）

あれは櫻です。（櫻でせう　櫻でした）

菓子ならたべよう。（菓子なり茶なり　菓子なりとも召上れ）

〔四三〕明日は天氣よかるべし。（べく　べし　べき　べけれ）

心して見るべかりけり。（べから　べかり　べかる　べかれ）

推量の助動詞

雲のいづくに月やどるらむ。（らむ　らめ）

奥山には霰降るらし。（らし）

あはれ今年の秋もいぬめり。（めり　める　めれ）

さる事もあらむ。（む　め）

思ふ事なくてぞ見まし。（まし　ましか）

如何なる心なりけむ。（けむ　けめ）

に於ける文語動詞べしべかりらむらしめりむましけむのやうに、物事を推し量る意を現はす助動詞を**推量の助動詞**といふ。口語の推量の助動詞はうようらしいらしかつの四語で、

あれは鳥だらう。

あの人は必ず來よう。

雨が降つてゐるらしい。（雨が降つてゐるらしく思ふ）

どうもさうらしかつた。

といふやうに用ひる。

〔四四〕文語助動詞のらむむけむはらんんけんとも書く。口語の推量の助動詞うは四段活用の動詞の未然形につくのであるから「書こう」「讀もう」「取ろう」など書くは誤である。又ようをやうとして、「止めやう」「絶えやう」など書くのも誤である。

〔四五〕文讀み習ひき。（き　し　しか）

都をさして上り行きけり。（けり　ける　けれ）

學びの業を終へつ。（て　つ　つる　つれ　てよ）

斯くて日も暮れぬ。（な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね）

山の端に月出でたり。（たら　たり　たる　たれ）

時の助動詞

彼はよく勉強せり。（り　る）

明日は空晴れむ。（む　め）

に於ける文語助動詞きけりつぬたりりむのやうに、働きの行はれる時を現はす助動詞を**時の助動詞**といふ。口語の時の助動詞はたうようの三語で、

月が出た。（出たらう。雨が降つたり月が出たり）

明日は雨が降らう。

今に空が霽れよう。

といふやうに用ひる。

〔四六〕文語の時の助動詞けりは純然たる詠歎の意味に用ひられる事があり、つぬはつべしぬべしのやうに純然たる強めの意味に用ひられる事がある。それからりは四段活用の

已然形とサ變の未然形とに限つてつくのであるから、「命絶えり」「遠く隔てり」のやうに用ひるのは誤である。

〔四七〕業未だ成らず。（ず　ぬ　ぬる　ぬれ）

聊も知らざりき。（ざら　ざり　ざる　ざれ）

雨は降らじ。（じ）

雨は降るまじ。（まじく　まじ　まじき　まじけれ）

打消の助動詞

に於ける文語助動詞ずざりじまじのやうに、働きを打消す意を現はす助動詞を**打消の助動詞**といふ。口語の打消の助動詞は、ぬないなからまいの四語で、

風が吹かぬ。（吹かずに　吹かねば）

風が吹かない。（吹かなくても　吹かなければ）

風は吹かなからう。（吹かなかつた）

風は吹くまい。

といふやうに用ひる。口語助動詞のぬはんとも書く。

使役の助動詞

〔四八〕書を讀ます。（せ　す　する　すれ　せよ）

試驗を受けさす。（させ　さす　さする　さすれ　させよ）

書を學ばしむ。（しめ　しむ　しむる　しむれ　しめよ）

に於ける文語助動詞すさすしむのやうに、他のものに働きをさせる意を現はす助動詞を**使役の助動詞**といふ。口語の使役の助動詞はせるさせるの二語で、

畫を書かせる。（書かせた　書かせれば　書かせよ　書かせろ）

琴をしらべさせる。（しらべさせた　しらべさせれば　しらべさせよ　しらべさせろ）

といふやうに用ひる。

〔四九〕強く打たる。（れ る るる るれ れよ）

厚く賞せらる。（られ らる らるる らるれ られよ）

に於けるるらるのやうに、他のものから働きをしかけられる意を現はす助動詞を受身の助動詞といふ。口語の受身の助動詞はれるられるの二語で、

受身の助動詞

蜂にさゝれる。（さゝれた さゝれれば さゝれよ さゝれろ）

苦しめられる。（苦しめられた 苦しめられれば 苦しめられよ 苦しめられろ）

といふやうに用ひる。

〔五〇〕汽車にても汽船にても行かる。

如何なる困難にても堪へらる。

飛ばば天にも昇るべし。

たゆまずば千里の道も行くべかりけり。

に於ける文語助動詞るらるべしべかりのやうに、その働きの出來る意を現はす助動詞を可能の助動詞といふ。るらるは受身のるらると同じく、べしべかりは推量のべしべかりと同じやうな用ひ方である。口語の可能の助動詞は、れるられるの二語で、

可能の助動詞

汽車でも汽船でも行かれる。

遠くからでもよく見られる。

といふやうに用ひる。これも受身のれるられると同じやうな用ひ方である。

〔五一〕都を出で立たせ給ふ。

式場に臨御せさせ給ふ。

式場に臨ましめ給ふ。

御手づから書かる。

目出度く歸朝せらる。

に於ける文語助動詞せさせしめるらるのやうに、他の働きを敬ふ意を現はす助動詞を**尊敬の助動詞**といふ。これらの語の用ひ方は使役又は受身の場合と一致してゐる。口語の

尊敬の助動詞

尊敬の助動詞は、れるられるますの三語で、

君はどこへ行かれるか。

先生が親切に教へられる。

君もさう思ひますか。（思ひませう　思ひましたか　思ひます＝れば　思ひなさいませ　思ひなさいまし）

のやうに用ひる。れるられるの二語の用ひ方は受身の場合

と一致してゐる。

〔五二〕花見に行きたし。（たく　たし　たけれ）

に於ける文語助動詞たしのやうに「かうしたい」「かうありたい」と望む意を現はす助動詞を**希望の助動詞**といふ。口語の

希望の助動詞

希望の助動詞はたいたからの二語で、

早く見たい。（見たくても　見たければ見よ）

早く見たからう。（見たかつた）

といふやうに用ひる。

〔五三〕歳月は流るゝごとし。（ごとく　ごとし　ごとき）

に於けるごとしのやうに、何々のやうだといふ意を現はす助動詞を**比説の助動詞**といふ。口語の比説の助動詞はやう＝だやうですやうなの三語で、

比説の助動詞

まるで秋のやうだ。（やうだらう　やうだつた）

まるで秋のやうです。（やうでせう　やうでした）

山のやうな浪。（山のやうなら）

といふやうに用ひる。

練習

○次の文中から助動詞を摘出して、文語・口語の別をいへ。

一、櫻の花の、深山の岩陰などに、何知らぬさまして咲ける、或は磯山の茂れる雜木の間などに、ちらゝと紛れぬ色を見せたる、あはれも淺からず。

二、散りぎはの殊に美しきは櫻なるべし。

三、かゝる田舍ならでは見らるまじき景なり。われは日一日あかず眺め暮しぬ。

四、何を見ても思出の種とならないものはありません。

五、雲雀は高く高く、まるで小さい點のやうになつて空へ上つて行く。あゝして流れて雲の中に入つて、からだは消えて聲だけが殘るのだらう。

六、昨夜は雨風いと烈しかりしが、今朝は空晴れわたりて、いとうらゝかなり。

七、吾等は今中學一年の課程を了へて、將に二年に進まんとするなり。

初級中等國文典　終

動詞活用對照一覽表

×印をつけた語は語幹と語尾とを區別し得ぬものである。

文語

種類	語例	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段活用 カ行	書く	書	く	か	き	く	く	け	け
四段活用 ガ行	漕ぐ	漕	ぐ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段活用 サ行	押す	押	す	さ	し	す	す	せ	せ
四段活用 タ行	立つ	立	つ	た	ち	つ	つ	て	て
四段活用 ハ行	笑ふ	笑	ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段活用 バ行	學ぶ	學	ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段活用 マ行	讀む	讀	む	ま	み	む	む	め	め
四段活用 ラ行	去る	去	る	ら	り	る	る	れ	れ
變格活用 ナ行	死ぬ	死	ぬ	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
變格活用 ラ行	有り	有	り	ら	り	り	る	れ	れ
變格活用 サ行	す	×爲	せ	せ	し	す	する	すれ	せよ
變格活用 カ行	來	×來	こ	こ	き	く	くる	くれ	こよ
上二段活用 カ行	起く	起	く	き	き	く	くる	くれ	きよ
上二段活用 ガ行	過ぐ	過	ぐ	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
上二段活用 タ行	落つ	落	つ	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
上二段活用 ダ行	恥づ	恥	づ	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
上二段活用 ハ行	强ふ	强	ふ	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
上二段活用 バ行	延ぶ	延	ぶ	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
上二段活用 マ行	試む	試	む	み	み	む	むる	むれ	みよ
上二段活用 ヤ行	報ゆ	報	ゆ	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
上二段活用 ラ行	懲る	懲	る	り	り	る	るる	るれ	りよ
上一段活用 カ行	着る	×着	る	き	き	きる	きる	きれ	きよ
上一段活用 ナ行	煮る	×煮	る	に	に	にる	にる	にれ	によ
上一段活用 ハ行	干る	×干	る	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
上一段活用 マ行	見る	×見	る	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上一段活用 ヤ行	鑄る	×鑄	る	い	い	いる	いる	いれ	いよ
上一段活用 ワ行	居る	×居	る	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
下二段活用 ア行	得	×得		え	え	う	うる	うれ	えよ
下二段活用 カ行	受く	受	く	け	け	く	くる	くれ	けよ
下二段活用 ガ行	擧ぐ	擧	ぐ	げ	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げよ
下二段活用 サ行	寄す	寄	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
下二段活用 ザ行	交ず	交	ず	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
下二段活用 タ行	建つ	建	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
下二段活用 ダ行	出づ	出	づ	で	で	づ	づる	づれ	でよ
下二段活用 ナ行	束ぬ	束	ぬ	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
下二段活用 バ行	並ぶ	並	ぶ	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ
下二段活用 ハ行	堪ふ	堪	ふ	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
下二段活用 マ行	譽む	譽	む	め	め	む	むる	むれ	めよ
下二段活用 ヤ行	絶ゆ	絶	ゆ	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
下二段活用 ラ行	流る	流	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
下二段活用 ワ行	植う	植	う	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ
下一段活用 カ行	蹴る	×蹴	る	け	け	ける	ける	けれ	けよ

口語

種類	語例	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段活用 カ行	書く	書	く	か	き	く	く	け	け
四段活用 ガ行	漕ぐ	漕	ぐ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段活用 サ行	押す	押	す	さ	し	す	す	せ	せ
四段活用 タ行	立つ	立	つ	た	ち	つ	つ	て	て
四段活用 ハ行	笑ふ	笑	ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段活用 バ行	學ぶ	學	ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段活用 マ行	讀む	讀	む	ま	み	む	む	め	め
四段活用 ラ行	去る	去	る	ら	り	る	る	れ	れ
四段活用 ラ行	有る	有	る	ら	り	る	る	れ	れ
四段活用 ナ行	死ぬ	死	ぬ	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
變格活用 カ行	來る	×來	る	こ	き	くる	くる	くれ	こい
變格活用 サ行	する	×爲	る	せ（し）	し	する	する	すれ	せよ（しろ）
上一段活用 カ行	起きる	起	きる	き	き	きる	きる	きれ	きよ（ろよ）
上一段活用 ガ行	過ぎる	過	ぎる	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ（ろよ）
上一段活用 タ行	落ちる	落	ちる	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ（ろよ）
上一段活用 ダ行	恥ぢる	恥	ぢる	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ（ろよ）
上一段活用 ハ行	强ひる	强	ひる	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ（ろよ）
上一段活用 バ行	延びる	延	びる	び	び	びる	びる	びれ	びよ（ろよ）
上一段活用 マ行	試みる	試	みる	み	み	みる	みる	みれ	みよ（ろよ）
上一段活用 ヤ行	報いる	報	いる	い	い	いる	いる	いれ	いよ（ろよ）
上一段活用 ラ行	懲りる	懲	りる	り	り	りる	りる	りれ	りよ（ろよ）
上一段活用 カ行	着る	×着	きる	き	き	きる	きる	きれ	きよ（ろよ）
上一段活用 ナ行	煮る	×煮	にる	に	に	にる	にる	にれ	によ（ろよ）
上一段活用 ハ行	干る	×干	ひる	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ（ろよ）
上一段活用 マ行	見る	×見	みる	み	み	みる	みる	みれ	みよ（ろよ）
上一段活用 ヤ行	鑄る	×鑄	いる	い	い	いる	いる	いれ	いよ（ろよ）
上一段活用 ワ行	居る	×居	ゐる	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ（ろよ）
下一段活用 ア行	得る	×得		え	え	える	える	えれ	えよ（ろよ）
下一段活用 カ行	受ける	受	ける	け	け	ける	ける	けれ	けよ（ろよ）
下一段活用 ガ行	擧げる	擧	げる	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ（ろよ）
下一段活用 サ行	寄せる	寄	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ（ろよ）
下一段活用 ザ行	交ぜる	交	ぜる	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ（ろよ）
下一段活用 タ行	建てる	建	てる	て	て	てる	てる	てれ	てよ（ろよ）
下一段活用 ダ行	出る	×出	でる	で	で	でる	でる	でれ	でよ（ろよ）
下一段活用 ナ行	束ねる	束	ねる	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ（ろよ）
下一段活用 バ行	並べる	並	べる	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ（ろよ）
下一段活用 ハ行	堪へる	堪	へる	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ（ろよ）
下一段活用 マ行	譽める	譽	める	め	め	める	める	めれ	めよ（ろよ）
下一段活用 ヤ行	絶える	絶	える	え	え	える	える	えれ	えよ（ろよ）
下一段活用 ラ行	流れる	流	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ（ろよ）
下一段活用 ワ行	植ゑる	植	ゑる	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ（ろよ）
下一段活用 カ行	蹴る	×蹴	る	け	け	ける	ける	けれ	けよ（ろよ）

昭和六年二月十三日印刷
昭和六年二月十七日發行
昭和六年四月一日訂正再版印刷
昭和六年四月六日訂正再版發行

初級中等國文典

定價金三十一錢

著者　東京市外西大久保二百三十六番地　塚本哲三
發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦捷一
印刷者　東京市神田區錦町三丁目九番地　佐久間修三
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　合資會社有朋印刷社
大賣捌所　大阪市東區横堀四丁目　三宅莊藏書店

初級中等國文典
不許複製
有朋堂書店
塚本

84

広島大学図書
2000039478